

世界の動きがわかる!



Sri Lanka スリランカ内戦

混迷する スリランカの 民族和解

4月25日、妊婦を装った21歳のタミル人女性が陸軍司令部内で、フォンセーカ司令長官の乗用車に自爆攻撃を行った。護衛の兵士11人が死亡し、同司令官を含む27人が重傷を負った。6月26日、陸軍のパラミ・クワトゥンガ参謀副総長も、コロンボ郊外で自爆攻撃を受け爆死した。タミル人居住地区に空爆を行う政府軍と、ゲリラ戦のLTTE軍の抗争が激化しつつある。

中村 尚司 =文
(鎌谷大学経済学部教授)
text by Nakamura Hisashi

【内戦と津波からの復興】

インド洋の島国スリランカでは、北東部州における少数民族の自決権をめぐって、1983年より武力抗争が続いていた。2002年2月22日に、ノルウェー政府の斡旋により、スリランカ政府と「タミル・イーラム解放の虎(LTTE)」との停戦協定が締結された。多数民族のシンハラ人も少数民族のタミル人も、20年ぶりに実現した戦争のない暮らしが何物にも代えがたいと認め、その永続を願っている。南部の主要都市では無差別的な自爆攻撃の不安から解放され、警察と軍隊の検問所が少なくなった。その分だけでも人々の暮らしは明るく

なった。北東部でも地雷の除去作業が行われるに従い、国内避難民や海外からの帰還難民の再定住も徐々に進んだ。内戦からの復興途上である04年12月26日に、スマトラ島沖で発生した地震と津波は、スリランカ北東部州の沿海地方を中心に大きな被害を及ぼした。死者と行方不明者だけでも4万人近く、被災者の総数は100万人を超えるといわれている。国際連合の諸機関、日本政府を含む各国政府は、戦後復興と災害復興の双方に巨額の援助を申し出た。しかし、内戦の和平交渉が停滞し、これらの外国援助をうまく活用できていない。05年6月25日、ノルウェー政府の斡旋によって、スリ

【最近の動向と支援の課題】

ランカ政府とLTTEとの間で、海岸線から2キロに限定した「津波被災後の復興事業を共同で実施する機構に関する協定」が締結された。懸案だった協定の締結によって、国際社会による支援活動にも拍車がかかるものと強く期待された。ところが、この協定をめぐって、政府与党内の対立が激しくなり、実施されていない。この協定とは別に現地では、被災直後からJICAを含むさまざまな援助団体が活動を続けている。

LTTE軍との武力衝突が多くなり、06年に入ると半年間で約700人の死者(多数の民間人を含む)を出す規模にまでエスカレートしている。東部州でLTTEに反旗を翻したカルナ派も、この武装抗争を激化させる要因である。ノルウェーのソルハイム開発相の斡旋で、停戦4周年記念日にジュネーブにて和平交渉の再開が試みられたが、見るべき成果を残すことができなかった。このような状況を打開すべく、国際的な復興支援計画を作成した共同議長国である日・米・欧州連合(EU)・ノルウェーの4者会合が、本年5月30日に東京で開催され、スリランカ政府とLTTE

Eとの両者に停戦協定を遵守し、武力の行使を抑制するよう強い要請を行った。スリランカ内戦の特徴は、交戦団体と第三者団体のいずれの側にも多種多様なアクターが混在していて、誰もが強い主導権を取り難い状況にあることだ。これが事態を錯綜させ、解決を困難にしていると同時に、逆に見れば全面戦争が展開しない要因でもある。JICA、国際協力銀行(JBIC)、NGOなどもさまざまな役割とはいえず、全面戦争の展開を防ぐアクターになっている。その限りで、多くの方々の方々の労苦はいくぶんなりとも成果をあげてきたといえよう。

Column

シンハラ人公務員のタミル語習得政策

本年6月29日付の「Hindu」紙によれば、スリランカ政府のグナセーカラ憲法担当相は、シンハラ人の公務員がタミル語を習得するのに、250米ドル相当の奨学金を与え、その成果に従って賃金の加給を行うと発表した。スリランカでは、憲法上シンハラ語とタミル語の双方が公用語と定められているにもかかわらず、軍人や警察官などには、タミル人がほとんど採用されない上に、公務員の圧倒的多数を占めるシンハラ人は、タミル語の読み書きがほとんどできない。公務員採用政策とともに、この点は従来からタミル人の反発が強かった。遅ればせとはいえ、このような政策の実施が、両者の和解への大切な一歩である。